

Title	航西の東道主人：成島柳北「航西日乗」とそれ以前の海外紀行文
Author(s)	Fraleigh, Matthew
Citation	京都大学國文學論叢 (2002), 8: 64-89
Issue Date	2002-06-30
URL	https://doi.org/10.14989/137306
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

航西の東道主人——成島柳北「航西日乗」とそれ以前の海外紀行文——

マシユー・フレリーリ

明治四年から浅草東本願寺境内で漢文と英語を教えていた成島柳北（1837-1884）は、翌明治五年九月東本願寺一行五名の会計・渉外係として洋行の機会を与えられた。一行の目的は、仏跡参拝と西洋宗教の視察だったが、九ヶ月にも及んだ旅行では、東南アジア諸国を始め、フランス、イタリア、イギリス等を廻った。明治六年五月下旬柳北は、同行者の一人である石川舜台（1805-1931）と一緒にイギリスを発ち、アメリカ経由で日本への帰途に就いた。洋行経験の実は、東本願寺翻訳局の局長、そして『朝野新聞』の社長となった柳北帰国後の活躍にすぐ現れたが、その経験を直接テーマとする作品が世に出たのは、随分後のことである。明治十四年から、九年前の洋行中したためた手記を元に、「航西日乗」という海外紀行文を『花月新誌』に連載した。

「航西日乗」が次の時代の文人たちに大変影響を及ぼしたことは、森鷗外「航西日記」（一八八九年）との類似か

ら見られる。前田愛氏は、この二つのテクストに於けるサイゴン入港の描写が酷似していることを指摘し、「ドイツ留学を命じられたときに、ヨーロッパへ向う旅程の予備知識を得るために、鷗外が「花月新誌」の「航西日乗」をあらためて読みかえた可能性は十分に考えられる。「航西日記」という題名の類似もさることながら、叙述のスタイルも「航西日乗」のそれが規範に求められたと思われるふしがある」（①、P.16）と説明する。谷口巖氏も小島憲之氏も鷗外の「航西日記」を論じるのに、前田氏が挙げたサイゴン入港のほかにも柳北「航西日乗」との類似点数箇所を指摘している。そして、上田正行氏は、久米邦武『米欧回覧実記』（一八七八年）との対比も含めて、鷗外「航西日記」がこの二つの先行紀行文と似通った所を四十六点ほど列挙した²⁰。

しかし、今までは「航西日乗」とそれ以降の海外紀行文との類似性がよく指摘される一方、それ以前の海外紀行文

との関連はあまり問題にされて来なかったようである。本稿では、一八六七年パリ博覧会使節に参加した渋沢栄一・杉浦謙の『航西日記』（明治四年、一八七一年）と中国初めての遣欧使節に携わった斌椿の『乗槎筆記』（同治五年、一八六六年）を始め、柳北が洋行中に読んだ先行者の紀行文がどのような影響を及ぼしたかということについて考察を試みたいと思う。先行紀行文との比較は、「航西日乗」という作品を文学史的なコンテキストに位置付けるという意味もあるが、その執筆過程について考えさせる機会でもある。

一 紀行文執筆者と先行文献

日本人の幕末明治初期の紀行文や見聞録を読むと、著者が自分の書こうとしているテキストをより広い文献的なコンテキストに置こうとする傾向が見られる。自ら新しい世界に旅すると共に、先行文献を頼りに目の前にある風景や風物を理解しようとする姿勢である。その傾向は、最初の使節団のメンバーたちが記した書物から早くも現れるものである。例えば、万延元年の遣米使節に参加した森田岡太郎（清行、1812-1861）は帰国してまもなく亡くなったが、「亜行日記」というものを残した。この近世初めての遣外使節がニューヨークにいる間、西洋の結婚式を見る機会が

与えられた。そこで森田は、その様子を「亜行日記」に次のように描いた。「新夫婦ノ家ニテハ親類縁者ニヤ人多ク集リ居ル、婿ノ親類ハ新婦ノ口ヲ吸、娘ノ親類ハ婿ノ口ヲ吸フコト礼式ノ由、新婦ノ服ハ白キ衣ニテ白キ薄物ノ冠リモノ地ヲ曳ク程長ク垂ル、由、婿ノ衣ハ平常ニ異ナラズト云フ、按スルニ幸太夫物語ニ、魯西亜ニテ婚礼ノコトヲ記セシ処見エタリ、凡同様ナリ併セ見ルベシ」とある（『浮城物語』）。つまり、遣外使節の先駆者である森田も、自分の目の前にある風物を、以前に読んだロシア漂流民の見聞の記録である『北槎聞略』と比較することによって認識している¹¹⁰。

著者が執筆中、先行文献をどう利用するかは、著者によってそのスタイルが異なるが、ある紀行文では、それが考証的にさえ見える。文久二年の遣欧使節に福地源一郎、箕作秋坪、松木弘庵（後の寺島宗則）、福沢諭吉、水品楽太郎等、柳北の朋友や桂川甫周サロン関係者が多く参加したが、帰国後攘夷感情が高まるのを背景に、紀行文や見聞録をなかなか発表できなかったようである。しかし、松平石見守の従者としてこの使節に参加した市川渡（清流、一八二四年生）は、面白い紀行文『尾蟻欧行漫録』を著わした。『尾蟻欧行漫録』は文久三年（一八六三年）の成立と考えられているが、写本があるものの日本で刊行されたかどうかは不明である。皮肉なことに一八六五年から一八六六年

まで、イギリス外交官アーネスト・サトー (Ernest Snow, 1843-1920) による英訳がサムマースの *The Chinese and Japanese Repository* 等に連載された。

市川が自分の目で確かめた細かい数字的な描写が著しい紀行文だが、先行地理誌などを活用している。例えば、使節がロンドンに在る四月二日の記述に、「當府ノ總説ハ余別ニ之ヲ記セサル故ニ姑ク左ニ玉海箕作氏ノ坤輿圖識ニ載スル所ノ要ヲ摘テ此ニ出ス宜シク之ヲ參看シテ以テ其概略ヲ知ルヘシ」(p. 350) と、ロンドン全体像といくつかの名所の描写を「坤輿圖識」から引用する。この書物は弘化二年(四年(一八四五)四七年)のものだが、箕作阮甫(1799-1863)の養子だった箕作省吾(1821-1847)がオランダ語の地理誌を翻訳して纏めたものである。市川は引用する際に、「蓋シ憶フ是便今ヲ距凡三十年餘モ以前ノ西書ヲ譯スル所ナリ方今ノ如キ一日ハ一日ヨリモ盛ナル彼國ニシテ豈此ニ止ルヘケンヤ因テ余カ別ニ得タル彼ノ千八百六十年ノ土籍ノ如キモノニ記セル所ヲ左ニ掲ケテ以其盛大ヲ知ルノ一斑トス」とこだわり、新しい参考資料として当時のイギリス海軍報告も綿々と引用する。右の但し書きから明らかだが、市川は西洋の様子を正確に伝えるという自負があったようである。紀行文著者にとって、先行文献を引用する行為は、その信憑性を確かめる機会でもあれば、その欠点を補う機会でもあった。市川はこの他にも、五月十

七日のハーグ、五月二十八日のアムステルダム、六月二十三日のベルリン等々ヨーロッパ主要都市の描写を阮甫の作である『八紘通誌』から摘要している。そして、ロシアに入ると、七月十三日や七月二十二日の条には、大槻玄沢(1757-1827)の『環海異聞』に触れている³⁰⁰。いずれも、先行文献を引用するのは、その引用文から新しい情報を提供する為ではなく、むしろ既知の情報を述べることによって自分のいる場所、目の前にある風景を先行文献という地図に位置付ける為であった。

柳北の「航西日乗」には、そうした考証的な傾向は認めがたいにしても、時々伝聞等を記す。例えば九月二十日「香港盜賊多キヲ懼レ皆本船ニ還リテ寐ヌ」とあり、そして二十一日にも「香港ニ泊スル兩夕地ニ盜兒多シト聞キ客館ニ投宿セズ」と二回ほど香港の治安の悪さに触れている。この見方は恐らく当時の日本人洋行者の共通認識だったから敢えて先行文献に求めなくてもいいだろう。しかし、やはり先行文献を明らかに意識して下敷きにしているところもある。シンガポールを出港する場面を記録する(「航西日乗」十月二日の記述に『乗槎筆記』なる書物が挙げられる。「晴天陰微涼肌ニ可ナリ右ニ麻陸岬ヲ見ル蜿蜒トシテ長ク看テ午後一時ニ至テ始テ雲烟ノ間ニ没セリ新嘉坡ヨリ一小豹ヲ檻ニ鎖シテ船中ニ載セ來タル旅客有リ其人云フ佛都巴里ノ博物館ニ送ルナリト晚餐「アナ、」ヲ食ラフ味頗ル美ナリ

夜ニ入り雷雨涼ヲ送ル蓋シ赤道近傍ノ地夜雨常ニ多クシテ
午熱ヲ濯フ造物人類ヲ愛護スル是ニ喜ブ可シ此日乗槎筆記
(清國斌椿所著)ヲ同行人ニ借テ讀ム亦是レ一個ノ東道主
人ト爲スニ足レリ」とある⁹⁰。「東道主人」とは左伝の故
事に基づく言葉で案内人という意味があるけれども、柳北
はここで斌椿の『乗槎筆記』を自分が不慣れな土地を旅す
る際に頼むべき案内役と挙げている。

斌椿 (Bin Chun, 一八〇四年生) は、一八六五年頃、中国
総稅務司の英国人ロバート・ハート (Robert Hart) の秘書
を勤めていた⁹¹。英語が出来なかつたらしいが、中国にい
た外交官と親しくなり、彼らから地理誌をもらつて示唆を
与えられたようである。その時ハートは、来年自分が帰省
するので中国人の学生一二名を一緒に連れて行つたら向こ
うの風土人情を一覧するに絶好のチャンスであると中国側
の外交スタツフに勧めた。それで、洋行すべき学生が皆若
いため、斌椿はその「老成可靠」の引率者を務めるように
命ぜられた。斌椿とその息子及び後年再び洋行した張得彝
等学生三名は、ハートに付き添つて翌同治五年一月二十二
日 (7 Mar 1866) 北京から出発し、天津、上海を経て、二
月十二日香港を出てフランスの汽船でマルセイユへ向つ
た。三月十八日 (2 May) マルセイユに着いた一行は、フ
ランス、イギリス、オランダ、デンマーク、スウェーデン、
ロシア等ヨーロッパ諸国を四ヶ月間弱廻り、同年十月中国

へ帰つた。斌椿の紀行文である『乗槎筆記』は、同年に刊
行されたようである。

その後『乗槎筆記』は、日本に渡り、重野安繹 (成斎、
1831-1910) の関と大槻誠之 (東陽) の訓点をつけられ、「明
治壬申季夏」(一八七二年) に全二巻で東京の袋屋亀次郎
より刊行された。柳北が旅立つた同年九月十三日よりほん
の少し前のことだから、柳北が船で同行者から借りて繙い
たのは、この刷りたての版本だったのである。斌椿が外
国の言葉もできない、その思想制度も分からない人である
ことが必然的にその理解の範囲を閉ざしてしまったことが
指摘され、『乗槎筆記』は中国で従来低い評価を受けた書
物である。しかし、中国人による初めての西洋紀行文とし
てそれなりの価値があるだけでなく、日本でも明治初期
に出版され読まれた書物として日本人による紀行文を読む
際にも見るに値する。なお、詩をよくした斌椿は『海国勝
游草』と『天外帰帆草』という海外体験詩集も著わしたが、
その漢詩は『乗槎筆記』には殆ど現れない。またこれらの
詩集が明治日本に伝わつたかどうかは、不明である⁹²。

「航西日乗」で直接挙げられる『乗槎筆記』のほかにも、
柳北が旅で読んだ先行紀行文がもう一つある。柳北の同行
者の一人である松本白華 (1838-1926) は、自分の紀行文
を書きながら、柳北「航西日乗」の草稿と思われるもの
を旅の途中書き写した。その書き写した部分は「航海録

「A」と呼ばれている。「航海録A」から柳北は洋行中もう一つの紀行文を読んでいたことが分かる³⁰⁾。右に挙げた引用文の原型は「航海録A」十月二日の条に「陰冷可喜。右見馬六岬。蜿蜒而長看、到第一時後而始失其地。舟中讀『乗槎筆記』斌椿著『航西日記』清淵著。頗堪爲東道主人」とある。清淵というのは、渋沢栄一（1840-1931）の号だが、『航西日記』は、明治四年に耐寒同社より刊行された紀行文（全六冊）である。なお、『航西日記』の扉にあるようにこの書物は、「青淵漁夫」（こと渋沢栄一）一人の作ではなく、『霧山樵者』（こと杉浦讓、愛蔵、1835-1877）との「同録」である。杉浦も渋沢も慶応三年徳川慶喜の名代としてパリへ行き万国博覧会に参加した徳川昭武に付き添った。渋沢は最後まで昭武の側にいたが、杉浦は、幕府瓦解の場合昭武の留学を継続すべきかどうかを幕府と相談するために慶応三年八月二十二日マルセイユからフランスの汽船に乗り、十月十五日帰国した。『航西日記』は二人の共著だが、杉浦の「航海日記」（横浜からパリまで）と、渋沢栄一の「御用日記」等（パリや其の他の都市）を基に、大いに補って縫い目が目立たないように紡ぎ合わせた書物である。出版した時に杉浦の漢詩四十数首も「帰東雜草」として第六巻の終わりに付け加えられた。この漢詩は主にヨーロッパや帰路で見たアジア諸国の風物を詠んだものだが、その一部は、多少違う形で杉浦の「帰朝日記」にも見られ

る。

柳北の「航西日乗」を読む時、『航西日記』を傍らに置くとその書かれている事柄をより詳しく理解できる時がしばしばある。例えば、九月十八日台湾近海を通っていた時に柳北は次の一首を詠んだ。

書在篋中酒在瓶 書は篋中に在り酒は瓶に在り

心安不覺度滄溟 心安らかにして覺へず滄溟を度るを

艙窓眠足閑無事 艙窓眠り足りて閑にして事無し

坐聽朝餐第一鈴 坐ろに聴く朝餐の第一鈴

右の詩から大体どういう様子を詠んでいるかは察しがつくと思うが、現代の読者にとって、当時の船の具体的なききたりはすっかり馴染みの薄いものになったため、「朝餐第一鈴」はピンと来ないかもしれない。渋沢・杉浦の『航西日記』にある説明を借りると、「朝より夜までに。食ハ。二度。茶ハ。三度を常とし；總て食事及び茶には。鐘を鳴らして其期を報ず。鳴鐘。凡二度。初度ハ旅客を頓整し。再度ハ食盤に就かしむるを常とす」（一卷三丁才、渋資四六三頁）。

柳北の「航西日乗」にこのような説明がなされていないのは、先行文献に既に説明がなされていると考えたからではないだろうか。つまり、当時の読者にとって「朝餐第一鈴」は既知のことであるということを前提として、この一首が「航西日乗」に登場する。同じように西洋の食器等を

説明する必要はない。文久三年成立した市川の『尾蟻欧行漫録』にスプーンを「匕」、フォークを「肉叉」、ナイフを「庖丁」といっいち説明し、そしてついでに西洋トイレの構造と使い方も詳しく述べているのは、初期の海外紀行文であるだけに頷ける。しかし、明治四年に発表された『航西日記』でさえ、西洋食器それぞれを「銀匙」、「銀鉢」、「庖丁」と紹介し、コーヒーを「カッフヘー」といふ豆を煎じたる湯」等と説明している。だから、このような説明が翌年洋行に出た柳北の「航西日乗」になされていない背景には、時代の迅速な変化も勿論あるが、やはり西洋の事物に慣れていないから珍しがらない、敢えて説明するまでもないという柳北の通の姿勢もあるだろう。

同じように『乗槎筆記』も当時の船の生活に照明を当てる場合がある。例えば、九月二十二日新しい汽船に乗って香港から出航した柳北は、その日の記述に「且ツ炎熱甚シキヲ以テ厨奴代ル々々繩ヲ引キ風扇ヲ舞ハシテ席ヲ扇グ快言フ可カラズ」と述べる。斌樁も二月十三日香港からサイゴンを目指して出航した時に「是日熱甚舟中懸風扇十以五人搖拽坐中習習生風百餘人食飲不覺酷熱也」(是日熱甚シ、舟中風扇十ヲ懸ケ、五人ヲ以テ搖拽坐中習習トシテ風ヲ生シ、百餘人食飲スル酷熱ヲ覺ヘザル也)と食堂の中の様子を具体的に描き、柳北と同じ快感を記している。或いは、右の柳北の漢詩に見える「艙」という字は「ふなぐら」

と訓ぜられるが、船荷を置くための倉庫に限定せず、広く船室として使われていたということは『乗槎筆記』から分かる。例えば二月七日の記述の「房艙」と同月十一日の「内艙」は、どちらも「ヘヤ」と東陽訓点本で読まれている。

現代の読者が「航西日乗」を先行紀行文と同時に読んだら、その言葉遣いや具体的な事情をより明確に把握できることは、以上の例から明らかだが、柳北も旅の途中にその文献を参考にしていたから、執筆の際新しい世界の風物の捉え方は、先行文献を読むことによつて左右されたはずである。故意に表現を先行文献から借りたと想定しなくても、そのテクストをその時読んでいた以上殆ど必然的に多少影響されただろう。例えば、柳北は、九月二十九日に次の漢詩を読んだ。

南邊麻陸北蘇門 南辺は麻陸北は蘇門
地勢蜿蜒兩蟒奔 地勢蜿蜒として兩蟒奔り
奔到洋中不相接 奔りて洋中に到りて相接せず
雙頭對處萬帆翻 雙頭對する處万帆翻る

この詩でマラッカ海峡の地形(マレーシア半島とインドネシアのスマトラ島)を二つの大蛇に見立てているが、同じ比喻でマラッカ海峡を捉える視線は、『航西日記』に見られる。そこで「麻刺加蘇門答刺」とを。左右にして東洋第一の海關なり。亞細亞大地より海中へ長蛇の如く。突出し」(一巻十八丁オウウ、浚資四六八頁)とある。柳北は、『航

西日記』にある蛇の喩えに示唆を与えられたらう¹¹⁰⁰。

或いは十月十九日猛烈な暑さに耐えながらアラビア半島を右に、アフリカ大陸を左に紅海を渡った柳北は次の一首を詠んだ。

電光夜掣萬重山 電光夜掣す万重の山

爛々碎紅波浪間 爛々として紅を碎く波浪の間

毒熱侵人烈於火 毒熱人を侵すこと火よりも烈し

行舟正過鬼門關 行舟正に過ぐ鬼門關

この詩の最後の一句にある「鬼門關」は早くから中国の史書に見える言葉だが、現代広西省の東北部にあたる容県の地理を伝える『唐書』地理志四に次の説明がある。「縣南三十里、有兩石相對、其間關三十步、俗號鬼門關……其南尤多瘴癘、去者罕得生還、諺曰『鬼門關、十人九不還』」。つまり、「鬼門關」以南の地域ではマラリア等の病気がはびこるから、そこへ行く人は、殆ど生きて帰って来ないということだが、以後「鬼門關」はある特定の地域を指すだけではなく、辺鄙で険悪な地域を喩えるようになった。右の絶句にいう「鬼門關」は、第三句にある「毒熱」と共鳴してその言わば伝統的な意味を踏まえているが、その上に一重の新しい意味合いが施してある。

同じ一帯を数回通った渋沢と杉浦は、『航西日記』に次のように書いた。「就中五六月頃ハ。酷烈を極め。病者等其候を犯し航すれハ。必損するといふ。我儕の航せし。我

二月又六月九月に在り。其六月に挂りしハ。暑熱聞が如し。困耗。疲勞。不寐。連夜に及へり。牛羊も終夜喘^{イハク}する止す。歐人の此海上を呼て鬼門關と唱へ怖るゝ人を欺かず」

(一卷二十八丁オウウ、渋資四七一頁)¹¹⁰¹。この記述から

分かるように、従来険悪な毒気に満ちた地域を「鬼門關」と喩える漢語の習慣と、西洋人が当地を「鬼門關」と呼ぶ習慣が柳北の一首にうまく重なる。なお、西洋人の当地の名称については、色々似たようなものがあつたようである。

例えばこの一帯は、Ernst Haekel (1834-1919) のスリランカ紀行文 *Indische Reisezüge* (一八八三年) では、ドイツ語の *des Teufels Punschessel* と呼ばれているが、同書の英訳ではそのまま *the Devil's Punch Bowl* とある。そして第一次世界大戦に出陣するためにそこを通つたオーストラリア兵士 William Dick Stevens の日記によると、当地は *Helis Gate* と *The Gates of Hell* とも呼ばれていた。複数の言い方があるが、別に渋沢・杉浦そして後に柳北がどれを踏まえたかということの問題にしないでいいだろう。とりあえず『航西日記』にあるように、当時この一帯がそのような名称で呼ばれ、そして柳北はその二重の意味をかけて「鬼門關」と表現したことは疑いの余地がない。

「航西日乗」の漢詩は、外国の風物を描写して、それを見る筆者の感受を表す形をとるから、どちらかと言えば現代読者にとつて分かりやすいものが多いと思う。しかし、

なかには古典文学の故事が時々登場する。例えば、九月十二日香港に入る前に柳北は次の一首を詠んだ。

昌黎驅鱷已千秋 昌黎鱷を駆りて已に千秋

驚見巨魚波上浮 驚き見る巨魚の波上に浮ぶを

回首洋雲渺無際 首を回らせども洋雲渺として際無し

天邊何處是潮州 天辺何の処かはれ潮州

昌黎は韓愈 (768-824) のことだが、元和十四年 (八一九年) に潮州 (現代の広東省) へ刺史として左遷された。韓愈がこの新しい地方官の仕事に就いた時、潮州の人々は、鱷に悩まされた。鱷は、街の中に巢食つて住民の家畜を喰つていたから、文章を得意とする韓愈は、政府の責任者として、鱷に向かつて「鱷魚の文」というものを披露した。韓愈がそこで生真面目に天命という觀念を借りて天子の代表である自分の退治命令に従うのは尤もだとか、鱷にとつて広い海のほうが適しているとか、様々な議論を繰り広げて、鱷を海へ帰るように説得しようとする姿勢が面白い。

「航西日乗」を単独で読むと、潮州近海を通っている柳北が、巨大な魚を見たらすぐ韓愈の鱷の故事を連想して漢詩に詠んだことが、なかなか新鮮で面白い発想と思われるだろう。ところが、実は潮州近海を通つた時にこの故事を連想した先行者は少なくない。例えば洪沢・杉浦の『航西日記』一月二十日には、「地圖に據りて考ふれハ。潮州あたり歟と思はる。唐の韓愈の鱷魚の文ありしも。昔時に

替りて牢固の巨船に乘じ。萬里波濤を枕席とせる。其時代の境概。懸に異るより推せハ。世運日新に赴ける。亦一瞬間の間にあるを知る」(一卷十丁オウウ、洪資四六五頁)。當時の文人にとつては、恐らく潮州と韓愈と「鱷魚の文」は縁語のように結びついていた。言い方を変えると、古代中国文学を共有するこの頃の文人たちの頭脳中の地図には、潮州は韓愈の左遷先であり、「鱷魚の文」を著わした所だというふう位置付けられた。由緒ある地を実際に訪れている洪沢・杉浦は、自分が今乗っている牢固の巨船を意識し、歳月の移り変わりに思い至つたが、遠隔な地であるはずの潮州へ意外にも早く着いてしまった斌椿も同じような気持ち述べている。二月十日に「辰刻過潮州計吳淞開船兩日行三千五百里非輪船之神速焉能如是」(辰刻ニ潮州ヲ過ク、計ルニ吳淞ニ船ヲ開キ、兩日行クコト三千五百里、輪船之神速ニ非ンハ、焉ソ能ク是ノ如クナラン)とある(一卷八丁オウ)。

「航西日乗」の漢詩上の表現だけではなく、汽船で寄つた港の描写も先行文献と似通っている。前述のように前田愛氏は、森鷗外の「航西日記」のサイゴン入港描写が「航西日乗」のそれに酷似していると指摘した。しかし、そもそも柳北「航西日乗」がそれ以前の洪沢・杉浦の『航西日記』に似ていることを指摘したい。まず洪沢・杉浦の『航西日記』一月二十五日条から見よう。「午時瀾滄江の入口。

燈明臺の禁に至る。夕四時比。東埔寨河(カンサヤ)口へ入て。上流に溯る此間兩岸。綠樹繁茂し。根株水涯に浸し。樹樹尻尾長き猿の羣り遊ぶを見る。川幅本邦墨田川程なり。往々狹曲にいたれハ。船尾旋らさず鱗戻して過ぬ。暮六時頃。柴棍の港に着ぬ【割注：此地安南。南隅瀕江の地。樹園領なり。香港より九百十五里。通常程。四日。緯度十度十七分にて。季節暑熱。土地肥饒。風俗。支那に似て陋し】：此夜星斗燦爛。銀漢低て。叢裡の虫聲秋を報ず。氣候の變する。瞬息の間亦航行の迅速なる。旅客の感を増す(一卷十四丁オウウ、洪資四六六く六七頁)とある。

一方柳北「航西日乗」九月二十五日には、次のような描写がある。「十一時遙二燈臺及ビ人家ヲ認ム乃チ知ル塞昆港ニ近キヲ亭午港口ニ入ル兩岸綠樹幽草風景畫ノ如シ處々ニ蘇鐵ノ大樹有リ又獼猴ノ群ヲ爲シテ遊ブヲ見ル人家アル處ハ秧針青々トシテ本邦四五ノ候ニ似タリ大河ナレド流レハ緩ク水ハ濁レリ屈曲シテ上流ニ泝ル舟人ニ問フ一ハ曰ク是レ瀾滄江ナリト一ハ曰ク是東埔寨川ノ下流ナリト余地理ニ昧シ他日詳カニ地圖ヲ按ズ可シ四時塞昆ニ達ス是レ安南ノ都邑ニシテ近年佛國ノ所領トナレリ人種ハ支那ニ類ス男女其齒皆黒シ椰子ヲ食フニ因ルカ屋舎ノ甍瓦皆赤色ナリ始テ椰樹林ヲ見ル此日寒暑針九十四度本港ハ赤道ヲ距ル僅二十度十七分ナリト云フ夜舟中ニ眠ルニ兩岸ノ蟲聲啾々トシテ耳ニ盈チ流螢亂飛スルヲ見ル」(傍点引用者、以下同)

とある(二二)。

そして柳北は次の一首を詠んだ。

夜熱侵人夢易醒 夜熱人を侵して夢醒め易し

白沙青草滿前汀 白沙青草前汀に滿つ

故園應是霜降節 故園應に是れ霜降の節なるべし

驚看蠻螢大似星 驚き見る蛮螢の星よりも大なるを

前田愛氏に言わせると右の記事と漢詩に「異国の風物に誘いだされた憂鬱をまじまじとみつめている柳北の孤独な心を垣間見る想いである」(①、p. 178)。そのとおりだが、ここに現れる不慣れな風物をもたらす旅愁も自国との氣候的比較も洪沢・杉浦の「叢裡の虫聲秋を報ず。氣候の變する。瞬息の間亦航行の迅速なる。旅客の感を増す」と通じらる。

このサイゴン風俗描写にある「男女其齒皆黒シ椰子ヲ食フニ因ルカ」は檳榔嗜好についての描写だが、「椰子」の実は普通、白いものとして認識されるから、柳北の推定は聊か理解に苦しむものである。思うに、この「椰」字は本来「榔」だったかもしれない。「航西日乗」の草稿と思われる「航海録A」には「第四時、達柴昆。樓閣頗壯、瓦皆赤色。始見榔樹。土人皆蕃髮、人種與支那同。男女齒皆黒、而多赤脚」となっているので、魯魚の誤の可能性は充分考えられるが、同じ文献を見た上田正行氏は、違う結論に至った。上田氏はこの部分を挙げて、柳北が帰国後久米邦武

『米歐回覽実記』等を参考にしながら「航西日乗」のテク

ストを定めたと思わせる箇所としている。「漢文体〔筆者注、「航海録A」が簡潔で書き下し文〔筆者注、「航西日乗」は引き延ばされている。漢文体では歯の黒い理由が示されていないが、書き下し体では示されている。椰子と檳榔では異なるが、「花月新誌」掲載にあたり「実記」が参観されたのであろうか。もともと「輿地誌略」、「暹羅」の項に「檳榔ノ実ヲ嚼ムニ因リ口唇皆赤黒ニシテ」とあるの
で、「実記」ばかりを想定できないが」とある(②、p. 85, n. 14)。

「航西日乗」を「航海録A」と比べると、掲載段階でかなり手を入れられたことが容易に見られるが、柳北が檳榔嗜好について啓蒙されるのは、久米邦武の『米歐回覽実記』を待つまでもなかっただろう。柳北は旅で持っていた先行紀行文から原住民の赤い歯とその檳榔嗜好との因果関係を既に知っていたはずである。例えば、渋沢・杉浦の『航西日記』二月七日には、スリランカのガールの原住民の特徴が次のように描かれている。「其体、披髮、裸跣、腰間、僅に更紗木綿ウツマキもて掩ふ。色黄黒にて。深目黒齒赤唇イリメクロクハアキアキチンに似たり。下民、平生烟草を買い得ざるものハ、檳榔を嚼して、吸烟タバコに換る。故に自ら齒黒みて鉄漿を銜むに似たり」(一卷二十一丁ウ、渋資四六九頁)とある。それから柳北の同行者松本白華も「印度雜詩」十四首の内、次の一首がある(②、

乾二才)。

龍眼肉甘椰子香 龍眼の肉は甘く椰子は香し

唇紅齒黒嚼檳榔 唇は紅く齒は黒く檳榔を嚼む

島中男女重宗教 島中の男女は宗教を重んず

只有法王無國王 只法王有るのみ國王無し

「航西日乗」の五月四日に見られるロンドン植物園の記事に、「椰子檳榔竹等ノ熱帯産ノ物ヲ栽培ス」とあり、或いは柳北が評語をつけた中井弘の『漫遊記程』(明治十年)という海外紀行文にも「椰子檳榔交接枝」と始まる七言絶句等その他の「椰子」と「檳榔」に関する記述が見られる。柳北の植物学的造詣の深さを追究することは外的試みに違いないが、広義的な字使いにせよ、魯魚の誤りにせよ、いずれにしても「航西日乗」にある「椰子」はココナツの意味ではないだろう。

サイゴンから柳北たち一行はシンガポールへ向った。当時イギリスの植民地だったこの港に入ると、帝国主義の産物の一つを目の当たりにした。当時西洋の船客が港に着くと銀貨を海に投げて、港に遊んでいる現地の子供たちを水に飛び込ませ銀貨を拾わせた。まず柳北の記述を見てみよう。「航西日乗」九月二十九日に「兒童皆裸體ニテ瓜片様ノ小舟ニ乗リ來タツテ文具ノ類ヲ賣ル客小銀錢ヲ水中ニ投ズレバ跳テ水ニ没シ之ヲ攫シテ浮ブ蛙兒ト也タ似タリ」とある。これに比べると、渋沢・杉浦の『航西日記』二月一

日には、次の描写がなされている。「裸体の小兒小艇に乗り船側に群り。勧め錢を投げしめ。海中に入て拾ひ来る銅幣にてハ。水中認めがたしとて。銀貨にあらされハ跳入せず」【割注：本邦の江島。途中杯の如し。人情態更に異らず】其水中に争ふ亀の子の如く（一卷十九丁ウ〜二十丁オ、渋資四六八頁）とある。

この風景は現在の時点から見れば、後味が悪いが、当時の紀行文によく出てくるシーンである。同じ現象を描いているだけに、ある程度の類似性は予想できるが、例えば柳北の「之ヲ攫シテ浮ブ蛙兒ト也タ似タリ」と、渋沢・杉浦の「其水中に争ふ亀の子の如く」という比喩的な表現の仕様まで似ていることは偶然ではないだろう。しかも、先行紀行文の影響は表現のレベルだけではなく、視線の配り方や着眼する所にも現れる。つまり、この風習がもう既にシソガポールの代表的な名物と位置付けられたことを端的に示すのは、日本で刊行された斌椿の『乗槎筆記』にある挿絵である。港に浮かんでいる外国の船から投げられる硬貨を拾おうとする裸の子供たちを描く「新嘉坡港口之景」という挿絵と並んで、次の描写がある。「小兒鼓棹啾啾啾客皆以銀錢擲海中則羣躍沒水少頃握錢出蓋洋船至必以爲戲故兒童見舟皆拍手笑樂如拾韓媽彈丸也」（小兒棹ヲ鼓シ啾啾ス、客皆銀錢ヲ以テ海中ニ擲テハ則羣躍シテ水ニ沒シ少頃頃錢ヲ握リテ出ツ蓋シ洋船至ル必以テ戲ト爲ス故ニ兒童舟ヲ

見レハ皆手ヲ拍テ笑樂ス韓媽カ彈丸ヲ拾フカ如キ也。一卷十二丁オ）。仮に先行文献等を見なかったとしても、或いは直接先行者からなにも聞かなかつたとしても、柳北はシソガポール港の子供たちを目の前にしたら、同じように描いたと一応考えられるが、旅中で読んでいた『航西日記』や『乗槎筆記』のために、柳北の視線は自然にそこへひきつけられただろう。換言すればこの風物がもう既に「新嘉坡港口之景」と題された以上、柳北もそれに触れなければシソガポールの描写が不完全になる。

『乗槎筆記』を読んだ形跡が、シソガポール市民と市内の描写にも現れる。柳北は「土人皆黒面跣足ニシテ紅花布ヲ纏ヒ半身ヲ露ハス」と九月二十九日に説明して、そして翌十月一日シソガポール街に入り、「街頭ノ家ハ土人ト支那人ト雜居ス蓋シ閩廣ノ人移住スル者多シト云フ」という伝聞を記す。これを『乗槎筆記』に照らし合わせると、斌椿は二月十八日に馬車を雇い、その「御者亦麻六甲人肌黒如漆唇紅如血首纏紅花布則皆同；市肆百貨皆集成中華閩廣人也歸舟有頂帽補服者來謁閩省水師都閩陳鴻勳貿易於此云此間較本鄉易於謀生故近年中土人有八萬之多不憚險遠也」（御者モ亦麻六甲人、肌黒クシテ漆ノ如ク、唇紅ニシテ血ノ如シ、首ニ紅花布ヲ纏フハ則チ皆同シ、市肆百貨皆集ル咸ク中華閩廣人也、舟ニ歸ル、頂帽補服ノ者有リ、來リ謁ス、閩省ノ水師都閩陳鴻勳此ニ貿易ス、云フ、

此間本郷ニ較フレハ、生ヲ謀リ易シ、故ニ近年中土ノ人、八萬ノ多キ有リ、險遠ヲ憚カラザル也」と説明する（一卷十二丁オウウ）。柳北のいう華僑についての伝聞は、斌椿の『乗槎筆記』に記される陳鴻勳との対話によるかもしれない。

シンガポールの後スリランカのガールに寄ったが、ここで東本願寺一行が洋行目的の一つとして挙げた仏跡参拝が行われた。柳北の「航西日乗」十月七日条には、「山間ニ門有リ馭者曰是レ『ボウガハア』ノ寺ナリ乃チ車ヲ下ダリ門ニ入りテ中堂ニ進ム堂ニ釋尊ノ臥像ヲ安ズ其ノ巨大驚ク可シ而シテ陶製ナリ堂ノ四壁ニ地獄ノ畫圖有リ：堂後ノ山ニ登レバ一古墳有リ石ニ二級ニ疊ミ築造頗ル鞏固ナリ寺僧云フ釋尊分骨ノ墓ナリト墓碣無クシテ磚石ノ中央ニ一樹ヲ栽ウ僧云フ菩提樹ナリト僧ハ余方同行ニ贈ルニ貝葉經數葉ヲ以テス」とある。これだけを見れば、柳北たちがよくその山寺まで行き、その僧侶と交流を持ち、貝多羅經までもらったと思われる。しかし当時の日本人洋行者にとつてこれはセツト・コースの一部だったようである。例えば、文久遣欧使節に参加した杉孫七郎（重華、1835-1920）の「環海詩誌」にセイロン島の描写に「齊狼舊名獅子島相傳在昔釋迦自藍嶼來濟渡衆生山上今猶存足跡有古刹藏涅槃眞身」（五丁ウ）とある。そして柳北が実際に旅中で読んでいた『航西日記』には、「馬車を雇ひ：山に登る五六丁にて。

一個の佛寺に抵る。寺名ボーカハウアといふ。山門あり。門に入れハ：堂内安置せる。釋迦涅槃の像七ヤールトあり【割注、我凡曲尺二丈一尺余】磁製なり：堂の側、僧房。廂宇。みな天堂。地獄の圖を画けり。僧衣ハ袈裟のみにて。跣足禿頭眉毛を剃去り：山の後。即佛骨を収し所なりといへり。三層に築き。石壇を繞らし。中に一樹を栽たり。即菩提樹にて。外に物なし」（一卷二十二丁ウ〜二十三丁オ、洪資四六九頁）とある。

斌椿もここを訪れたようである。「乗四輪車：沿海濱約七八里：北入山六七里樹木陰翳景象殊幽花木多不知名間土人語不能解：旋登山入古刹有番僧數人臥佛長三丈許寺前後無碑碣是釋迦像欺抑明世所建歟不可考也」（四輪車ニ乗シ：海濱ニ沿ヒ、約ムネ七八里、：北山ニ入ル六七里、樹木陰翳、景象殊ニ幽ナリ、花木多クハ名ヲ知ラズ、土人ニ問フ語解スルアタハズ、：旋リテ山ニ登テ古刹ニ入ル、番僧數人有リ、臥佛長サ三丈許リ、寺ノ前後碑碣無シ、是レ釋迦ノ像カ、抑々明ノ世ニ建ツル所歟考フ可カラザル也。一卷十四丁ウ〜十五丁オ）。それから、久米邦武の『米欧回覽実記』にも帰路の途中岩倉使節団が同寺を訪れた記事が見える（第五冊、二八六頁）。以上の先行紀行文を念頭に置くと、「航西日乗」の「馭者曰是レ『ボウガハア』ノ寺ナリ」という記事は、東本願寺一行がたまたまこの寺まで辿り着いたのではなく、事前にその寺のことを『航西日記』

等から知つて馬車をそこまで走らせたように見える。特に
そう思わせるのは、柳北たち一行より半年程前にスリラ
ンカを通つた西本願寺の島地黙雷（1338-1911）が残した「洋
外漫筆」という紀行文では、「馬車、街を出て、海辺の公
道を通る。行くこと一里余にして一寺に到る。釈迦の坐
像あり。其景況『航西日記』に云ふ所と同じからず、即ち
嚮導誤指せるもの歟」（p. 130）とある。島地黙雷のこの紀
行文では、外にもしばしば目の前にある風景を『航西日記』
にある描写と比較しているが、ここで明らかに『航西日記』
所説の寺を指摘したことが分かる（111）。

ボウガハア寺参拜の往路に柳北たちはホテルに寄つてか
ら売春宿が建ち並ぶ道路を過ぎて行く。「市街ニ入り『ロ
ウレット』ト云フ逆旅ニ投ジ朝餐ス餐後同行四名馬車ヲ獻
ヒ海ニ向フ路傍妓肆多シ黒臉墨ノ如キ女子門ニ倚ル猥惡畏
ル可シ」。これも、斌椿の『乗槎筆記』二月二十六日に似
ている。「近岸三五里樓宇相望。聞盛時多係娼樓。瞥見酒
家女簪帘倚門螺髻絳唇面淡墨色見過客笑靨露赤足欲駭人
詢與夫亦娼面勸客入飲者嗜菩薩以天魔魍魎變相警悟大千歟
世有沈湎於此者惜不遇之」（近岸三五里、樓宇相ヒ望ミ：
聞ク盛時多クハ娼樓ニ係ル。瞥見ス酒家ノ女、帘ヲ
牽ケ門ニ倚リ螺髻絳唇、面淡墨色、過客ヲ見テ笑靨齒ヲ
露シ、赤足人ヲ駭カサント欲ス、與夫ニ詢フニ亦娼、面
アタリ客ヲ勸メ入り飲シムル者ト、嗜菩薩天魔魍魎ノ變相

ヲ以テ、大千ヲ警悟スル歟、世ニ此ニ沈湎者有リ惜ラ
クハ之ニ遇ハズ。一卷十六丁オウウ）。

最後の例は、柳北がシンガポール出航の際に詠んだ一首
である。「航西日乗」十月一日の記事は、「土人港頭ニ來タ
リ鷄鵝長尾猿ノ類ヲ鸞グ珍禽奇獸少ナカラズ」とあり、そ
して一首の漢詩でその様子を詠んだ。

幾個蠻奴聚港頭 幾個の蛮奴港頭に聚まり

排陳土產語歌々 土産を排陳して語歌々たり

卷毛黒面脚皆赤 卷毛黒面脚皆赤き

笑殺賣猿人似猿 笑殺す猿を売る人の猿に似たるを

このような東南アジアの原住民を動物として捉える視線
は、斌椿にも見られる。「猿猴小者不盈尺凡珍禽尤夥五色
俱備舟人購畜者以百數計大可悅目惟土人則黒肉紅牙獠獠狂
狂殊堪駭人使柳子厚至此必曰異哉造物靈秀之氣不鍾於人而
鍾於鳥」（猿猴小ナル者尺ニ盈タズ、凡ソ珍禽尤夥シ、五
色俱ニ備ハル、舟人購畜者百數ヲ以テ計フ大ニ目ヲ悅ハ
ス可シ、惟ク土人ハ則黒肉紅牙、獠獠狂狂殊ニ人ヲ駭カス
ニ堪タリ、柳子厚ヲ此ニ至ラシメハ、必ス曰ハク、異ナル
哉造物、靈秀之氣人ニ鍾ラズシテ、鳥ニ鍾ルト。一卷十二
丁ウウ十三丁オウ）。「獠獠狂狂」というのは、未開の原始的
な様子を形容する言葉だが、ここに出てくる柳子厚（柳宗
元、773-819）の「封建論」に見られる。そして「造物靈秀
之氣不鍾於人而鍾於鳥」も、柳宗元が天然に恵まれた美し

い山を背景とする自分の質素な新亭のことを述べた「崑州柳中丞作馬退山茅亭記」の「蓋天鍾秀於是」に基づく表現であろう。ここに挙げた斌椿引用文の最後の所は、「もしシンガポールを柳宗元に見せたら、彼はきつと大自然のすぐれた気は全部当地の色とりどりの鳥に施され、黒肉紅牙の原住民はそれを与えられなかったと言うだろう」という意味になる。柳北の発想は、斌椿とは多少異なるが、現地の住民と珍しい動物を接近させよう、或いは同じ平面で見比べようとする姿勢は斌椿と異曲同工のものであるのではないか。

二 紀行文類似性の意味

以上述べたように、「航西日乗」には先行紀行文と似通った節々が少なくない。この類似性をどう考えるべきだろうか。幕末維新期の海外紀行文での、あまりにもよく似ている記事の内容や表現のスタイルや視線の配り方に気付く現代の読者は、ややもすればこの現象を盗作とみなすかも知れない。鷗外「航西日記」の柳北「航西日乗」や久米邦武『米欧回覧実記』との類似点を指摘した上で「剽窃」かどうかを問題にした小島憲之氏は、次のような結論に至った。「しかし、このような創作上の態度は、実は典故、伝統を重んじる中国はもちろんのこと、それを承けたわが国

においても、明治のころまでは、まず許された文学上の作法であった。言葉を変えれば、優れた作品を典拠として新しい表現へと取り組む姿勢は、一般に肯定されたのである。たとえば和歌や連歌、謡曲の詞章などの場合、古歌のすぐれた詞句を昇華させてわが作品のうちに取り込む表現技巧「本歌取り」、それはその手際が鮮やかであれば、称揚の対象にこそなれ、貶められることはなかった。散文の場合も例外ではない」(註 5)と指摘する。小島氏の言うとおり、確かに当時の紀行文著者が先行文献の物事の捉え方や表現スタイルを受け継いだのは、その先駆者に敬意を払うおもわくもあったからだろう。しかし、紀行文の著者が先行文献の読者でもあるだけに、それを意識的に自作に取り込もうと思わなかったとしても、先行文献によってその枠組みが既に決められていたから、ほとんど必然的に先行文献とよく似たものが出来た場合もあるのではないか。

話がいくらかそれるが、知的財産権がよく問われる現在の法律は、この「剽窃」問題の一面を違う観点から再考できる機会を呈すると思う。文芸作品の著作権侵害の有無を定めるために *constr. a faire* という概念がある。あるアメリカの裁判所は一九七八年の判決で、「(作品で) 某トピックを取り扱う際に、実用上不可欠である又は少なくとも標準的である事件や登場人物や場面」と定義した。もともとこの判決は、一九七〇年代の話題作『ルーツ』という奴隷の話

を描くドラマの脚本家が訴えられた時に下されたものである。告訴人は、自分の奴隷に関する作品が被告に盗作され『ルーツ』という題名で発表されたと主張して訴訟を起こした。そして、その訴えを裏付けるために、自分の作品と『ルーツ』の類似点を幾つか挙げて、自作と『ルーツ』にこれほど多くの類似点が見出されるのは決して偶然でない」と主張した。ところが、判決によると、奴隷の話を設定とする以上、いやおうなしに「逃亡を試みる場面、吼えている犬に追われながら林を通り逃げようとする場面、奴隷の悲しそうな又は嬉しそうな歌声が聞こえる場面」等々がその作品に含まれるはずであるとして、盗作の疑いを認めなかった⁽¹⁰⁾。

紀行文は勿論フィクションと違って作者が実際に訪れた所の風物等を表現するものだから、同じコースを辿る人の紀行文は更に類似するはずである。しかし、紀行文を文学作品として読む時に、この *scènes à faire* という概念が剽窃の問題に少し光を投じると思う。つまり、幕末明治初期に海外紀行文が多く現れたため、その読者が海外にまだ出てなくとも、もう既にある程度そのコースやそれぞれの寄港の風物を知っていたはずである。因みに、近世・明治初期、実際に中国を訪れたことのない文人が中国「紀行」詩を数々詠み得たことを想起すると、海外未経験者の文人が夥しい文献を通じて頭の中にその未踏の地の輪郭をある程度把

握できたことが分かるだろう。そして実際に洋行した人も予備知識を得るために、或いはただの娯楽のために先行文献を読んだから、彼らが実際に紀行文を書いた際に既定觀念に左右されたはずである。日本で刊行された斌椿の『乗槎筆記』に「新嘉坡港口之景」という港の子供たちが硬貨を拾っている挿絵があるから、シンガポールに寄る場面が紀行文に含まれるなら、一つの *scène à faire* として子供たちが硬貨を拾う場面も登場することを予想できるのではない。換言すれば、明治初期の紀行文著者にとつて、海外で訪れる場所は全く未知のものではなく、既にある程度伝聞か先行紀行文からその様子を予知した所であるから、紀行文である作品にそこを訪れるという設定があれば、予知の知識を踏まえること（即ち *scène à faire* を作品に入れること）が、当然の結果として生じる場合もある。

これは、私たちが現在観光地を訪れる際に起こる現象でもある。聊か不遜に見られようが、この紀行文が画一化されるプロセスを「眠り猫現象」と名づけた。眠り猫は、日本美術史上でそれなりの価値があるに違いないが、東照宮を訪れる人が眠り猫を気にとめるのは、そのためではないだろう。眠り猫が全然目立たない位置にあるにもかかわらず、観光客がそれに関する予備知識があるからこそ、或いはガイドにそう教わるからこそ、注意して見るのである。そして観光客は、自分も眠り猫をちゃんと見たということ

が宛も東照宮の参拝者としての任務を果たしたという証拠のように記憶する。私は、今年四月初めて来日した母と叔母を、自分が嘗て三年間住んでいた栃木県に連れて行った。

英語を教えた葛生町も見に行つたが、いろは坂や華厳の滝、所謂観光サイトにも寄つた。日光東照宮に行つた時、例の

「眠り猫」の彫刻も勿論見逃さなかつた。彫刻が門の上にあるから、それをくぐる時に特別に頭上を注意しないと、気が付かない。「眠り猫」の存在を知らずに先を進もうとする母を呼び止め、「それは眠り猫だ」と指差しながら教えた。母が一瞬怪訝そうな表情をしたから、私はすぐ「この名物の一つだ」と付け加え、その標識に書いてある説明文を読み上げた。母はそれで納得がいったようだが、帰り際に眠り猫のデザインをした置物まで買い求めた。

「地球の歩き方」や「Lonely Planet」等が海外旅行の必需品となつた現在では、旅行者が外国で辿るコースは勿論のこと、その所々の捉え方までが旅行案内書物に意外と大きく左右されると言つても過言ではない。しかもこれは決して現代に限る現象ではない。十九世紀後半の当時でも、Burdett¹⁾を筆頭に、世界各地の旅行案内が多く出版された。幕末明治初期に洋行した者もその読者でもあつたようである。例えば文久二年の遣欧使節がマルタ島に着いた時にその行動がロンドンの主要新聞「The Times」に次のように報道された。

「一行が買い求めるのは懐中時計、宝石など貴金属品のほ

かに旅行案内、外国の地図、ガリバルデイの肖像画といったもので、ガリバルデイについてはどうやら詳しく知つてゐるらしい。一行は知性が高く、英語も話し理解できる者も数人いる」とある²⁾。洋書の旅行案内を頼りにした日本人洋行者もいるが、日本で刊行された数多い紀行文や見聞録を拠り所に新世界を理解しようとした人が多い。

小島憲之氏と同じように鷗外「航西日記」の先行文献との類似性を論じた上田正行氏も、類似点の多さが「剽窃」の証左ではないと述べて、ある程度必然的なことだといふ。しかし上田氏は、「我々日本人がとる一つの制度化された型のようなものが、それらの詩形の中にあるのである」とする^②、^③。上田氏のいうように、「一つの制度化された型のようなもの」が確かに当時の紀行文に見られる。しかし、それを「我々日本人がとる」特有な本質的国民性に還元する必要はないだろう。紀行文の類似性を日本人が普遍的に抱く感受性等に帰してしまえば、話が早い、結局何の説明にもならない。たとえ結果的に当時の日本文人たちが共有する捉え方があるとしても、それは日本人であることに由来しないだろう。だから「我々日本人がとる」という得体の知れないものを仮定するよりも、その「制度化された型のようなもの」ができるプロセスを見るべきだろう。つまり、以上の例が示すように、当時の日本人洋行者は、日本人である為ではなく、むしろ同じ先行文献を読

んだから、類似性は必然的に生じる。

類似点の多くは東南アジア諸国描写に集中しているが、その原因の一つは、恐らくマルセイユに到着するまで、六週間ぐらいの船上生活が続く中で、読書と詩作で無聊を紛らわしたからだろう。幕末明治初期に海外へ出た文人は少なくないが、洋行は彼らにとって紀行文を書いたり漢詩を詠んだりする機会でもあった。早い例として万延元年使節団に参加する際に「亜行日記」をつけた森田岡太郎は、帰国すると洋行中詠んだ漢詩百数首を選んで『航海雑詩』（一八六一年）として発表した。文久遣欧使節に参加した杉孫七郎も後年『環海詩誌』を出し、そして森山多吉郎と一緒に同じ使節の後発団にいた淵辺徳蔵の「欧行日記」という紀行文にも漢詩数首が見られる。柳北が旅立ちに際して詠んだ詩にも、その文学創作の意志が窺える。

右望巴黎城上月 右に望む巴黎城上月

左瞻龍動埠頭雲 左に瞻む龍動埠頭の雲

快哉萬里風濤上 快なる哉万里風濤の上

要作人間得意文 作らんとす人間得意の文

一見写実的に見える最初の二句に、「右」と「左」で自分の視点をはっきり設定しているものの、パリの月とロンドンの雲を両方とも同時に見ることが不可能であることは、勿論柳北も知っていたはずである。こういった風景を、同時に満喫できる唯一の場は、旅人の想像の中である。だ

から、「ヨーロッパに着いたらこういう事が見えるだろう」というふう述べているというよりも、今まさにそれを見ていて見ているというふうに読みたい。換言すれば、この詩の最初の二句は、自然描写を借りて筆者の旅立とうとしている時の高まる期待とわくわくする気持ちをよく表し、そしてその興奮がもたらす結果として柳北は頭の中でも既にヨーロッパへ飛んでしまったと言える。後の二句で、想像世界から一步退いて、「万里にも及ぶ海上の旅はいかに愉快か」と、今思い浮かべた世界へ行く手段を描き、そして最後に横浜の港という現実に戻って、これからの具体的な計画を述べる。つまり、この旅で思い切って紀行文を作りたいわけである。得意の文というのは、「私が得意とする文章」であり、「私の感じたこと、思ったことを忠実に反映する文章」でもある。

当時の日本人洋行者にとって、長い船の旅は、読書や詩作をする時間でもあったが、ここで注意すべきなのは、柳北が斌椿『乗槎筆記』も渋沢・杉浦『航西日記』も他の船客から借りたことが示すように、読書は個人の行動だけではなく、集団のコンテキストの中で行われたものだということである。詩作も同様である。例えば『航西日記』一月二十四日に日本人船客が「探題次酌」をしたという記事が見られる。それから松本白華は、柳北執筆中の紀行文を写して、自分の紀行文「航海録」にも柳北の漢詩を詩作の糧

にした。柳北たちが乗った船について言えば、この文学的交流は、東本願寺一行に限らず、松本「航海録」にあるように同船者の一人である司法省派遣の鶴田皓も一緒に詩作したと見える。紀行文は、先行文献と一緒に見たり、貸したり、借りたりしながら、そして漢詩を詠んだり答えたりするという集団的文学交流のなかで紡がれたものだから、その類似性の一つの原因はその執筆プロセスにも見出されるだろう。

先行紀行文の読書経験及び（上に仮に眠り猫現象と呼んだ）それによる事前的視線の形成と、集団的文学交流のコンテクストの中に行われた執筆の具体的なプロセスという二つの原因と並んで、もう一つの類似性の要素を挙げておきたい。「航西日乗」や鷗外の「航西日記」等明治初期の海外紀行文の類似性は、日本人独特の感受性に拠るものではないということを示すため、斌椿『乗槎筆記』との類似性を見れば充分であろう。しかし、それよりも斌椿との比較が教えてくれるのは、その類似性は漢詩を共有する漢字文化圏の文人たちの共通認識に由来するということである。例えば、柳北は結局「航西日乗」に入れなかったが、松本白華の「航海録A」に次の一首がある。

汽烟一迸白帆翻 汽烟一たび迸って白帆翻る

波浪推吾出海門 波浪吾を推して海門を出づ

島嶼依稀迷遠近 島嶼依稀として遠近に迷ふ

宛然漁父去桃源 宛然たり漁父の桃源に去くに

「航海録A」にある九月二十二日の日付を参考にすれば、この詩は柳北が次の寄港地サイゴンを目指して香港から出帆した時に詠んだ一首だろう。三句目と四句目は、明らかに陶淵明の「桃花源記」を指しているが、この連想は、斌椿の『乗槎筆記』のサイゴン入港描写と重なる。その二月十四日の記事に「熱甚換夏衣未刻入港口曲折東北行兩岸花樹叢擁青翠無際濶不過三四里狹處止數丈如入江南荻蘆洲又疑入武陵桃源」（熱甚シ夏衣ヲ換フ、未刻ニ港口ニ入り、曲折シ、東北ニ行ク、兩岸ノ花樹叢擁、青翠際リ無シ濶キ三四里ニ過キズ、狹キ處止數丈、江南荻蘆洲ニ入ルカ如ク、又武陵桃源ニ入カト疑フ）とある（一卷九丁ウ〜十丁オ）。

これは、柳北が直接斌椿の記事を典拠としているということではないだろう。陶淵明や彼に纏わる故事は早くから柳北の詩に登場するが、その故事を愛用した文人は勿論柳北の他にも大勢いる。約束事ではないが、船で見慣れない異様な風景を通りながら、方向と位置が分からなくなるという設定があれば、陶淵明の「桃花源記」の「晉太元中武陵人捕魚爲業緣溪行望路之遠近忽逢桃花林」を容易に連想するだろう。柳北も斌椿も古代中国の文学の流れを汲んでいるから、二人の思いつきが似ていることは当然である。前田愛氏は、鷗外と柳北のサイゴン入港描写を比較してか、二人の風景感覚に相通ずるものがあつたとすれば、

おそらく、それは同じ漢文体という言語世界につなぎとめられていたかれらの美意識ないしは感受性にかかわっている」と指摘した(①、p.111)。前田愛氏のいうとおりだが、中国の斌椿も、話す言葉が柳北や鷗外と違っても、やはり文人として同じ「言語世界」に存在していただろう。その紀行文『乗槎筆記』が早く日本に渡り、訓点をつけられるだけで日本人の読者にも読まれたことは、それを物語る。

しかも漢詩交流で結ばれる文人たちは、その題材を陶淵明など古典文学に属するものではなく、新世界の風物もどんどん漢詩に取り込んだ。現在の時点から振り返ってみれば、鎖国時代が終わって初めて西洋のことを詳しく知るチャンスを得たと考え勝ちだが、実は所謂「鎖国」時代にも日本人がかなり詳しく世界の情報を把握できたことは最近よく言われるようになった。そして、近世漢詩人がナポレオンを詠む漢詩を作ったこと等が示すように、文学の世界にも西洋の事柄が新しい糧となった。それから幕末明治初期に氾濫する海外紀行文と見聞録のお陰で国外の主たる名所や風習は、詳しく認識されるようになった。いわば当時の読者の認識では、漢字文化圏の彼方にあるのは白紙ではなく、かなり精密に描かれた地図だったのである(②)。こんな詳細な地図が出来たから、国外の名所と風物は、詩の題材となりえて、そして詩の題として存在した国外の事柄がその地図をより緻密にする役割も果たしただろう。

海外の事柄の漢詩題材形成を探るのに、最後にもう一つの詩の例を見てみよう。柳北は横浜を出てから一ヶ月以上も過ぎた時にスエズ運河に辿り着いた。スエズ運河は一八六九年に開通したから、万延元年や文久二年の幕末使節団は、アフリカの南の喜望峰を回って日本へ帰らなければならなかった。スエズ運河という新航路が具体的に何を意味するかということ意識して、柳北は次の詩を詠んだ。

疏鑿黄沙幾萬重 黄沙を疏鑿そさくすること幾万重

風潮洗熱碧浴々 風潮熱を洗ひて碧浴々

千帆直向歐洲去 千帆直ちに歐洲に向ひて去る

閑却南洋喜望峰 閑却す南洋の喜望峰

莫大の黄沙を切り開く大工事のお陰で、砂漠が運河に変身し、千隻の船がそこを通ることになった事を最初の三句に詠まれている。それに対して、第四句の意味は、不要となったあの南洋の喜望峰は、もう捨てられたと同然だということである。この詩を取り上げたかったのは、詩の発想が新鮮だからというよりも、むしろその反対だからである。要するに、指摘したいのは、この詩が四年前にできたばかりのスエズ運河を詠んでいるが、もう既に一つのパターンに属している。言い換えると、詩の題材としてのスエズ運河というのは、早くからある決まった輪郭をなしている。

幕末の頃イギリスの船に密航してヨーロッパに到った広島出身の村田文夫(1836-1891)は、四年間もイギリスに滞

在して、明治維新の後に帰国したが、その翌明治二年に『西洋聞見録』という書物を発表した。内容は、紀行文と違つてイギリスを中心に西洋の地理、政治、経済、風物を概括的に紹介するものだが、福沢諭吉の『西洋事情』（一八六六年―一八七〇年）と並んで明治初期に最もよく読まれた西洋紹介書である。柳北は明らかにその読者の一人である。例えばスエズ運河を通る時に「此夜一湖ニ入りテ停泊ス衝突ヲ畏ルル故ナリ此湖ハ西洋聞見録ニ云フ苦湖即チ是レナランカ」と十月二十日の記述にある。柳北は、『西洋聞見録』を洋行以前に読んだだろうが、旅の途中でも読み返したかもしれない。いずれにしても、『西洋聞見録』のスエズ運河の記事を見れば、こう書いてある。「溝野ノ最モ壮大ナルモノハス―エツ地峽ノ溝河是レナリ、ス―エツ地峽トハ地中海ト紅海ヲ遮隔スル所ノ地名ニシテ、阿非利加洲ト面刺伯トノ境堺ヲ云フナリ。此地峽ノ直徑僅々我カ三十里許ニ過ギズト雖ドモ、之ガ爲ニ西洋ト東洋トノ通路ヲ隔絶セラレ、不得^レ己喜望岬外ヲ過ギザルヲ得ズシテ其不便ナル事夥シケレバ、往昔ヨリ之ヲ鑿開シ西洋ヨリ東洋ニ航スル所ノ直路ヲ造ルノ議屢アリテ果タサバ^リシ事洋史ニモ見エタリ」と説明して、そのあと縷々とスエズ運河の工事を詳しく述べる。そして最後に「新海路開クルヲ以テ喜望岬外ヲ過航スルモノナクシテ此港竟ニ千載不易ノ要地トナルベシト云フ」(pp. 253-57)とある。「新船路之圖」という

題名でスエズ運河一帯の地図があり、そこに柳北が言及する「苦湖」の地名が真中に見られる。

村田がこれから繁栄すべきスエズ港と対照的に描く、誰も訪れる用がない喜望峰という組み合わせ及び表現の仕方は、柳北の詩の発想と一致している。村田や柳北のほかに同じようにスエズ運河を捉えた当時の日本人が数多くいる。例えば、明治五年五月、柳北より一歩早く西洋へ渡つた鹿児島出身の中井弘（櫻洲）は、四年後に帰国してからその経験を基にして『漫遊記程』という紀行文を明治十年に出した。そして面白いことに柳北は、その評語をつけた。

『漫遊記程』のなかに、帰国の途中であつた中井がスエズ運河を通つたが、地中海と紅海を結ぶ新しい海路の歴史と意味を詳しく述べてから、「運河歌」という七言絶句を詠んだ (p. 323)。

地中海接西紅海 地中海西のかた紅海に接し

墾破功成舟路通 墾破功成りて舟路通ず

可無航海蒙餘澤 航海の余沢を蒙る

こと無かる可けんや

閑却南洋好望峯 閑却す南洋の好望峯

この一首は『漫遊記程』のほかの詩と一緒に、川口久雄編の『幕末明治海外体験詩集』(pp. 80-81)に入っている。意味は川口氏の注釈の通りだが、柳北の評語「僕亦有閑却南洋奇望峯句唯一字耳亦可謂奇」が「僕も亦た南洋の奇望

峰を閑却すること有り。句、唯だ一字のみなるも、亦た奇と謂ふべし」と訓読され、そして「柳北は、喜望峰を奇望峰と思ひこんでいて、詩中『奇』の字を「好」と誤ったのが、くしくもケープタウンが閑却されている証左となっているといいたのである」と説明される。つまり、柳北も喜望峰の正しい字を知らないくせに、中井の正しくない字を指摘し、それが喜望峰のもう既になおざりにされた証だというような冗談を言っていることになる。これは、明白な誤読であろう。正しくは、次のように読むべきである。

「僕も亦『閑却す南洋の奇望峯』の句有り唯一字耳亦奇と謂ふ可し」。意味は、「私は自分の詩のなかで中井の第四句と殆ど同じ句がある。唯一字だけが違う。これは奇妙な偶然だ」ということである。

ある意味で、柳北の言うようにこの表現の一致はただの偶然に過ぎないが、この二つの詩と村田の『西洋聞見録』の一節が物語るのは、スエズ運河が、早く明治五年の時に一つの詩のトポスになっていたということである。このように海外の新しい場所が日本漢詩の題として形成されるが、言い方を変えると、西洋の名所が宛も和歌世界の歌枕のようになるといえるではないか²⁰。明治初期に西洋へ渡った日本人の多くは少なくとも個人的な日記をつけたが、人に見せるための紀行文を書いた人も大勢いる。それらを見れば、必ずその類似性に気付くはずである。それは、

コースが同じだったということも大いに関係していると思うが、松本白華が柳北の日記を旅の途中で写した²¹こととか、柳北が渋沢・杉浦の『航西日記』を参考にしたり、斌椿の『乗槎筆記』や村田文夫の『西洋聞見録』に自分の紀行文で触れたりすることとか、あるいは中井が自分の紀行文を出版した時に柳北に評語をつけてもらったことなどを考えると、やはり彼らが他の日本人の紀行文を読んでいたことがその類似性の主要な要素であることは明らかである。そういう意味で外国についての情報源として漢詩及び漢文紀行文が果たした役割は大きい。

（注）

（一）類似点のリストは上田正行氏（②、pp. 203-22）にある。

なお、久米邦武『米欧回覧実記』は、発表した時点から考えれば一応「航西日乗」以前のものになるが、本稿で「それ以前の海外紀行文」というのは、柳北の洋行自体の時点より以前の意味である。つまり、本稿では柳北が洋行中読み得た海外紀行文を見たい。

（二）『北槎聞略』は、桂川甫周（1751-1809）が大黒屋光太夫（1751-1828）等ロシアに数年間滞留した漂流民とのインタビューを通じて著わした本である。一七九四年完成。

（三）大槻が津太夫等ロシア帰りの漂流民から聞いたことを基にして著わした本である。

(四) この記述に出てくる「アナ、」というのは、パイナップルであろう。私の知っている限り、anana は現代英語には殆ど死語となったが、そもそもペル・ケチュア語 *nanas* から来たこの言葉は、現代フランス語でまだ使われている。

なお、洪沢・杉浦『航西日記』二月七日にあるスリランカ農産物のリストには、「芭蕉^{バナナ}の實」とあるから(一卷二十二丁ウ) 柳北のいう「アナ、」は芭蕉の実、即ちバナナのことかもしれないとも思われるが、柳北の「航西日乗」九月二十六日の記述に「芭蕉」とその「實」に触れているから、ここでフランス語のカタカナだけを表記していることは、芭蕉の実ではないことを示すだろう。しかも、「航西日乗」草稿を写した松本白華の手記(① p. 377)を見ると、十月二日「晩食垂那奈甘而美」(夜、アナナを食べた。甘くておいしい)と記録する所にパイナップルらしき果物の挿絵もある。

(五) 斌椿とこの使節については、Knight Biggerstaff と Zhong Shuhie (鐘叔河, pp. 60-72) と手代木有児氏(特に① p. 8, n. 24) が詳しい。Biggerstaff によると、Robert Hart は当時 Inspector-General of the Chinese Imperial Maritime Customs を勤めていた。ハートのアイルランド帰省を機に、洋行を選ばれた同文館の学生は、英語科の鳳儀 (Feng Yi) と張得彝 (Zhang Deyi)、そしてフランス語科の彦慧 (Yan Hui) だったが、この三人に加えてハートの事務所で勤務していた

斌椿の息子黄英 (Huang Ying) も同行することとなった。そして、一行の通訳任務を引き受けたのは、イギリス人 *C. Bowra* とフランス人 *E. de Champs* だったが、他に六人の召使も同行したようである。

(六) Knight Biggerstaff (p. 43, n. 5) によると、斌椿の紀行文『乗槎筆記』及び二つの詩集『海国勝游草』と『天外帰帆草』は、一八六八年に一巻として文宝堂より出版されたが、私はこの書物を見ることが出来なかった。なお、「乗槎筆記」及びこの二つの詩集は『走向世界叢書』に入っているが、本稿では『中華文史叢書第十二輯』所収の「乗槎筆記」(同治五年(一八六六年)刊本影印(以下、同治影印本)を参考にした)。

(七) 松本白華の手記全体は、「航海録」と呼ばれているが、更に二つの異質な部分からなるこのテキストは「航海録A」(松本の書き写した柳北「航西日乗」の草稿)と「航海録B」(松本自身の紀行文)というふうに呼び分けられている(前田愛氏による)。最初に白華「航海録A」が「航西日乗」の原型であるということ指摘したのは、前田愛氏②だが、上田正行氏も後に、「航西日乗」と「航海録A」に現れるその原型を比較した(特に①)。

(八) 『航西日記』からの引用は基本的に明治四年版の本に拠るが、変体仮名を改め、そして原文の字の右側にある振り仮名を削除し、左側にある振り仮名だけを表記した。『航西

日記』は渋沢青淵記念財団竜門社編纂の「渋沢栄一伝資料」第一巻（以下、渋資）にも翻刻してあるからそのページ番号も付け加えた。但し、この二つのテキストは、異なる漢字を使う場合も稀にある。

(九)『乗槎筆記』からの引用は、基本的に明治五年（一八七二年）の東陽大槻誠之訓点版（以下、東陽訓点本）に拠るが、原漢文と並んでその訓点に従って書き下し文も括弧に添えた。この和刻本を同治影印本に比べると、多くの割注を始め省略した部分が少なくないし、誤写や脱字も多少あるけれども、柳北が旅で実際に手にした可能性がより高いと思われる書物として、東陽訓点本を定本にした。この引用は東陽訓点本（一卷九丁ウ）にあるが、同治影印本との異同を示すと、次のようになる。（同治影印本）↓（東陽訓点本）面↓以抽↓搖清風習習↓習習生風 その後は同治影印本に「炎喝頓清」とあり東陽訓点本の「百餘人食飲不覺酷熱也」は見当たらない。

(一〇) 柳北は、この詩で地理上の位置と違つてマラッカを南側に、そしてスマトラを北側にしていることが気になる。単純な誤解は十分考えられるが、少し想像を逞しくすればこの誤認も『航西日記』に因るものだと考えられなくはない。つまり柳北も渋沢・杉浦もヨーロッパを目指して西へ進む途中シンガポールに寄つてマラッカ海峡を通つたから、船の左側は南になり、右側が北になる。だから『航西日記』

の「麻刺加蘇門答刺とを左右にして」という記事の「左右」を「南北」に変えたら、マラッカが南になり、スマトラが北になる。但し『航西日記』の「左右」は、唯「両側」の意味だったかもしれないから、この地理の誤認がどの段階で生じたかは確定できない。

(一一) 杉浦はパリ博覧会使館の前にも、文久三年十二月二十九日出航して翌元治元年七月十八日（一八六四年）帰国した池田筑後守横浜鎖港使節に参加した。それで鬼門関を通つた「我二月又六月九月」とは、『航西日記』に見える慶応三年二月、杉浦が渋沢より一步早くパリから帰国した九月、そして彼が池田筑後守使節と一緒に帰つた元治元年六月だろう。

(一二) この記事によると、柳北たちは正午に港口に入るが四時にサイゴンに到着する。現代の使い方から考えれば少し不自然かもしれないが、「港口」をサイゴンに至る川の入り口と解釈すべきだろう。

(一三) 例えば、黙雷はサイゴン入港を次のように書いた。「第一時瀾滄江に入る。江は頗る大河にして目力及ばずと云へども、殆んど十里余の幅有らんか。『航西日記』に墨田川に似たりと記せしは正しく柴棍近辺の事を云ふか。將た此江、縦横分流して其間皆洲と為り居れば、洲を誤て岸と見しか。何れにもせよ、チベットを河流とせる大源を墨水に比せしは不当なり」(pp. 120-121)と異を唱える。それからまた「先

に柴根に入りし河は、瀾滄江に非ずして別にダーネルと云へる河なり。瀾滄江は即ち秦浦茶河にして其間に今一河あり。是は瀾滄江の支流なり、諸家の記皆誤る。又案ずるに『航西日記』に台湾峽は潮水濁色を帯ぶる者は洋子江の末流なるが故と記せしは、恐らくは黄河の誤ならん。二河皆上海に出づ、容易く混ずる所以なり」とある (p. 125)。

(一四) この問題について Tad Friend の面白い記事を参照されたい。そこでフレンド氏は「原告側はハリウッドの大ヒット作が作られるプロセスを誤解している。大体映画製作会社は、無名天才から盗まないと作れない程の獨創性に富んだ作品を、そもそも作りたいたいと思っていないだろう」と指摘している。そして、フレンド氏は更に皮肉なことに、被告側が盗作の疑いを払拭する主要戦略として、問題の作品がいかに新しさに欠けているかを証明しようとする滑稽な有様を克明に描いている。

(一五) パレットの特派員が一八六二年三月二十九日に書いたこの記事は、四月四日の *The Times* に載った。原文は「国際ニュース事典・外国新聞に見る日本」① 1852〜1873 原文編 (p. 250) にあり、和訳はその「本編」(p. 230) にある。

(一六) 松本白華と柳北の詩文交流については、『国語国文』で発表予定の拙稿「成島柳北「航西日乗」の諸コンテキスト」を参照されたい。

(一七) 一八六六年に洋行した斌椿は、『乗槎筆記』によく中国文献にある東南アジアの描写を考証的に引用するが、二月二十六日、スリランカを出ようとする際、「自此以西則自古不通中國載籍不能考證惟據各國所譯地圖參酌攷訂而宗以瀛環志略耳」(此ヨリ以西ハ則古ヨリ中國ニ通セズ載籍考證スルアタハズ、惟各國譯スル所ノ地圖ニ據テ參酌攷訂シ而シテ宗ルニ瀛環志略ヲ以テスル耳)と書いた(東陽訓点本一巻十六丁ウ)。斌椿が中国を出た時に、友人徐繼畲 (Xi Jiyu, 1795-1873) から自作の西洋地誌である『瀛環志略』をもらった。右の引用文では、確かに古い中国文献の境界が見えるが、その彼方へ行こうとする斌椿は、まだ中国の新しい書籍に頼れる。

(一八) 谷口巖氏も同じ比喩を使う。

(参考文献)

和書

市川渡「尾蠅欧行漫録」 日本史籍協会編『遣外使節日記纂輯二』所収 東京大学出版会 一九七一年 (原著一八六三年頃)

上田正行①「松本白華航海録」『金沢大学附属図書館報こだま』(上、第92号、一九八九年一月一日・下、第93号、同年四月一日)

同 ②「航西日記」の性格」『金沢大学文学部論集文学科

篇』第九号 一九八九年

川口久雄 「幕末明治海外体験詩集―海舟・敬宇より鷗外・漱石にいたる」 大東文化大学東洋研究所 一九八四年

久米邦武(編) 田中彰(校注) 「特命全權大使米欧回覧実記」 岩波書店 一九七八年 全五冊(原著一八七八年)

小島憲之 「ことばの重み―鷗外の謎を解く漢語」 新潮社 一九八四年

洪沢栄一(青淵漁夫)・杉浦譲(霧山樵者) 同録 『航西日記』 全部六冊 耐寒同社 一八七一年

洪沢青淵記念財団竜門者 「洪沢栄一伝記資料」 第一卷 洪沢栄一伝記資料刊行会 一九六五年(本稿に「洪資」と略称)

島地黙雷 「洋外漫筆」 二葉憲香・福嶋寛隆(編) 『島地黙雷全集』 第五卷 本願寺出版部 一九七八年

杉孫七郎(重華) 「環海詩誌」 一九〇四年
杉浦譲 「歸朝日記」 『杉浦譲全集』 第二卷所収 杉浦譲全集刊行会 一九七八年

谷口巖 「森鷗外『航西日記』にみる文芸意識―福沢諭吉『西航記』と対比しつつ成島柳北『航西日乗』との類似性に説き及ぶ」 『愛知教育大学研究報告第一部人文社会科学学編』 二十五輯 一九七六年三月

手代木有児 「清末初代駐英施設(1877-79)における西洋体験と世界像の変動―文明観と国際秩序観」 『商学論集』 ①

第67巻第1号(一九九八年七月)、②第68巻第1号(一

九九九年八月)、③第68巻第2号(一九九九年十月)

中井弘 「漫遊記程」 『明治文化全集第七卷―外国文化篇』 改版 東京評論社 一九五五年(原著一八七七年)

成島柳北 「航西日乗」 『花月新誌』 第一百十八号(一八八一年十一月三十日) 第百五十三号(一八八四年八月八日) に連載 (ゆまに書房の『花月新誌』に覆刻)

同 「航西日乗」 『明治文学全集』 第四卷所収 筑摩書房 一九六九年

斌椿 「乗棧筆記」 重野安禪(成斎) 大槻誠之(東陽) 修文塾 袋屋亀次郎 一八七二年(本稿に「東陽訓点本」と略称)

前田愛① 「成島柳北」 朝日新聞社 一九七六年

同 ② 「柳北『航西日乗』の原型」 『近代日本の文学空間―歴史―ことば・状況』 所収 新曜社 一九八三年

松本白華① 「松本白華航海録」 柏原祐泉編 『維新期の真宗』 「真宗史料集成」 第十一巻所収 同朋舎出版 一九八三年

同 ② 「白華余事」 一九一六年

村田文夫 「西洋聞見録」 『明治文化全集第七卷―外国文化篇』 改版 東京評論社 一九五五年(原著一八六九年)

森岡岡太郎(清行) 「亜行日記」 『万延元年遣米使節史料集成』 第一巻所収 風間書房 一九六一年

漢籍

斌椿「乘槎筆記」『中華文史叢書第十二輯』所収 華文書局

一九六八年頃（本稿に「同治影印本」と略称）

同「乘槎筆記」鐘叔河編『走向世界叢書』所収 岳麓書

社出版 一九八五年

鐘叔河「走向世界—近代中國知識分子考察西方的歴史」『中

華近代文化史叢書』中華書局 一九八五年

洋書

Biggerstaff, Knight. "The First Chinese Mission of Investigation

Sent to Europe." *The Pacific Historical Review* 6:4 (December 1937);

reprinted in *Some Early Chinese Steps Toward Modernization*. San

Francisco: Chinese Materials Center, 1975, pp. 39-52.

Friend, Tad. "Copy Cats." *The New Yorker*. September 14, 1998.

Pp. 51-57.

Haackel, Ernst. *Indische Reisebriefe*. Berlin: Verlag von Gebrüder

Paetel, 1883.

... *A Visit to Ceylon*. Trans. Clara Bell. Boston: Cassino, 1883.

付記

ハーヴァード大学からシェルドン奨学金を頂いたお陰で、京都での研究期間を九ヶ月も延長することができたが、その委員会を始め、休学を許して下さった指導教官たちと学科にお礼を申し上げたい。日野龍夫氏は、本稿を読んでコメントして下さい、特に漢詩の書き下し文について丁寧な指導して下さい。そして柳本勝海さんには、『航西日記』の初版を始め色々手に入りにくい資料を借りていただいたが、(ハック)に記して謝意を表す。fraleigh@postharvard.edu

(Matthew Fraleigh・ハーヴァード大学博士課程)